HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市部消防団における大学生参加の意義と課題
Author(s)	櫻井, 幹大
Citation	社会教育研究, 32, 65-77
Issue Date	2014-04-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55328
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00231372_31_06.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

都市部消防団における大学生参加の意義と課題

櫻　井　幹　大*

目　　次

１．はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　65
(1) 問題の所在　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　65
(2) 先行研究の整理　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　66
(3) 課題設定／方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　67
２．実践の分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　67
(1) 概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　67
(2) 再開発開始による鉄西地区と鉄西分団の危機：Ｉ期　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　68
(3) 大学生の鉄西地区への参加：Ⅱ期　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　70
(4) 大学生消防団員の入団による鉄西地区の共助の再構築：Ⅲ期　・・・・・・・・・・・・・・　72
３．おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　74
(1) 結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　74
(2) 課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　77

１．はじめに

(1) 問題の所在

2011年3月11日に発生したM9の東日本大震災は、東北や関東地方をはじめ全国各地に甚大な被害をもたらした。また、福島第一原子力発電所の事故により漏れ出した放射能の被害は今もなお続いている。この未曽有の大災害からの復旧および地域振興が、今後我が国が取り組むべき第一の課題であろう。他方、防災という観点からいえば、大規模災害に対応するためには、国の防災対策はもちろんのこと、地方公共団体の取組み、さらにはNPOや地域の防災力を高めていく自発的な活動が必要であり、公的サービス（消防署）による公助だけに頼ることには限界がある。

つまり、災害に強いまちづくりを実現するためには、地域の一人ひとりの防災意識向上による「自助」の強化と、地域住民と消防団など既存の自主防災組織との協同的な防災、救助活動としての「共

* 修士課程修了

助[1]」を促進していくことが必須だ。ここでは、地域において、いかに共助を基本とした防災意識を醸成するか、いかに自主的な防災活動への参画を促していくかが重要な課題となろう。

しかし、地域における若者の活力不足が、そうした「共助」に基づいた自主防災の動きを鈍らせているという厳しい現状が立ちふさがっている。防災に限らず、まちづくりにおける「若者の不在」は、過疎地域だけではなく、人口の集中する都市部においても、就業構造の変化、まちづくりへの参画意識の希薄さ、居住地域に対しての無関心が、人口という数では図ることのできない潜在的な「若者の不在」を生み出しており、地域コミュニティに、深刻なダメージを与えていることも少なくない。[2]

また、地域の防災を担う消防団を始めとした地域コミュニティそれ自体が地域の都市化等の影響による変容などといった諸課題に対応することのなかった従前の在り方に起因する硬直的かつ閉鎖的な性質が、若者の不在をつくりだし、地域の共助が育まれない一要因となってきたのではなかろうか。本論では、都市部における「若者の不在」と「組織の硬直性」を打開し、相互の防災、救助活動としての「共助」を促進していくためのひとつの方策として、都市部で活動する消防団における若者の参画に着目をしたい。

(2) 先行研究の整理

①むら社会を基盤とした地域消防機関の変遷

後藤（2001）によると、明治以降の地域消防機関の歴史的変遷をたどると、若者組→消防組→自警団→警防団→消防団という流れを汲んでおり、現在の多くの消防団の原型はむら消防組に求めることができるとしている。むらの消防活動は元来、自然発生的なものであったため、むら独自の対応が組織上に色濃く反映されることが多かったのである。明治期以降にむら消防組は市町村に設立される公立消防組という過程をたどる事となったが、その根底にはむらの持つ強い縛り、共同体的規制が色濃く残っていたといえよう。

戦後新たに組織化された消防団においてもむらとの関わり方については、戦前より以前からのむら消防組と同一な文脈の上に位置付けられ、消防団は、地方中核都市においても、むら社会を存立基盤とすることが前提となった。このような認識のもとに、消防団は、かつては地縁的に若者を入団させ、地域の担い手へ成長させていくのだという暗黙の了解は存在し続け、むら型組織として消防団は存続し続けたのである。

②都市化地域における消防団の現状：むら型組織の限界

しかし、高度経済成長期を迎え、特に都市化地域においては、常設消防の充実化や社会経済状況、就業構造の変化により、むらの社会、経済的構造をも大きく変化させることとなり、消防団を取り巻く状況に変化をもたらしている。

消防団はこれまで自らを「自分たちの街は自分たちで守る」という郷土愛護と奉仕の精神の下で活動している組織であると主張してきた[3]。小西(1998)は、こうした消防団に貫かれている「公」の意識は、消火活動並びに災害時の諸活動などという修羅場において統制のとれた活動をするために必要なものであると評価している[4]が、このような考えが一方で消防団に硬直性と閉鎖性を招き、それに依る不都合も生じている地域もある。就業構造の変化や若者の地域における流動性を理解した上で、その中にある消防団の若者の地域参画を促す機能をより向上できる消防団の在り方がここでは課題となろう。

(3) 課題設定/方法

今後、消防団が地域防災のリーダー、共助の担い手として防災コミュニティの構築へ寄与するためには、従来とは大きく変容した地域の社会、経済の構造に応じ、その在り方、実態を問い直し、地域社会における消防団という組織としての日常的な理解と新たな意義を獲得する実践活動の展開が必要であり、この展開過程を明らかにすることがひいては、消防団の更なる発展につながるだろう。

以上から、消防団がもつ最大の打開すべき課題は都市部消防団にも色濃く残る「むら」社会を存立基盤としたその組織体制と、都市化による地域社会との間に生まれたお互いを理解しあうことの困難な現状はどのようにして打破することが可能か明らかにすること、そして新たな共助のコミュニティはどのように再構築されていくのか、この動態を明らかにすることであると筆者は考える。では、これらはどのようにして乗り越え、新たな共助コミュニティを再構築できるのであろうか。そしてこの再構築のプロセスとはいかなるものなのであろうか。本稿ではこれら課題を明らかにすべく、具体的な事例として、札幌市北消防団鉄西地区（以下、鉄西地区）の地域活動および札幌市北消防団鉄西分団（以下、鉄西分団）の地域防災活動を取り上げた。本研究では、筆者自身も鉄西分団に所属し、鉄西分団の地域へ向けた活動のほか、分団内における団員間の会話などのやりとりを記録し、また、団員や鉄西地区の地域住民へインタビュー調査を行った。以上の調査を、鉄西分団および鉄西地区の展開過程に沿って整理、分析することとした。

２．実践の分析

(1) 概要

①札幌市北区鉄西地区の概要

札幌市北区に位置し、南北は札幌駅北口から北12条通まで、東西は西1丁目の創成川から西11丁目までの区域を鉄西（てっせい）地区と呼ぶ。人口は約6,200人、世帯数は約4,300世帯（平成25年1月1日現在）で、その規模は、市内全地区の中でも小規模である。地区の中に北海道大学が含まれていることで、学生が多く居住する街（いわゆる学生街）の側面を持っている地域である。後述するが、特

に北八条から北九条にかけてはかつて木造住宅地と商店群が混在する市場（いわゆる北八条市場）を形成していたが、現在は数点の商店や住宅を残し大部分に高層ビル、マンション・アパートが建築されておりその街並みは大きく変化し続けている。

②札幌市北消防団鉄西分団の概要

札幌市北消防団鉄西分団（以下、鉄西分団）は、札幌市北区を管轄地とする札幌市北消防団のうち、鉄西地区を管轄とした分団である。鉄西分団は、鉄西分団の人員減少による団存続の危機を打開する一つの方策として、2006年から学生団員の募集を始め、鉄西分団の団員20人のうち10人が大学生または大学院生（2013年3月31日現在）となっており、札幌市内の消防団の通常の分団の中では最も分団員に占める大学生の割合が高い点があげられる。

(2) 再開発開始による鉄西地区と鉄西分団の危機（Ⅰ期）

①再開発開始以前の鉄西地区

・北八条市場

北八条市場の再開発事業は、札幌駅の鉄道高架化の工事決定に伴い市が1979年に発表した札幌駅周辺地区整備構想[5]を起点とし、札幌駅の高架化（1988年）、北八条西２丁目に建築された札幌第一合同庁舎（1989年）などが進展すると、鉄西地区の地域住民へ大きな影響が現れ始めた。

・再開発以前の鉄西分団の役目と働き

北八条市場の形成されていた再開発が始まる以前の鉄西地区では、そこで自営業の商店を構える各店主を中心に鉄西地区の連合町内会や、鉄西分団が構成されてきていた。消防団員自ら火事の木造家屋内に入り消火作業を行っていたため、鉄西分団は、公助としての防災機能の性格が強かった。

・再開発以前の鉄西地区におけるまちづくり

当時の鉄西地区の町内会は、町内会活動と消防団活動は別枠のものとして考えられてきていた。しかしながら、消防団と町内会の構成員の間では同じ地区住民として日常的な世間話などによるやりとりは行われていた。また、青年部も組織されていたが、大学生の住民は参加していなかった。

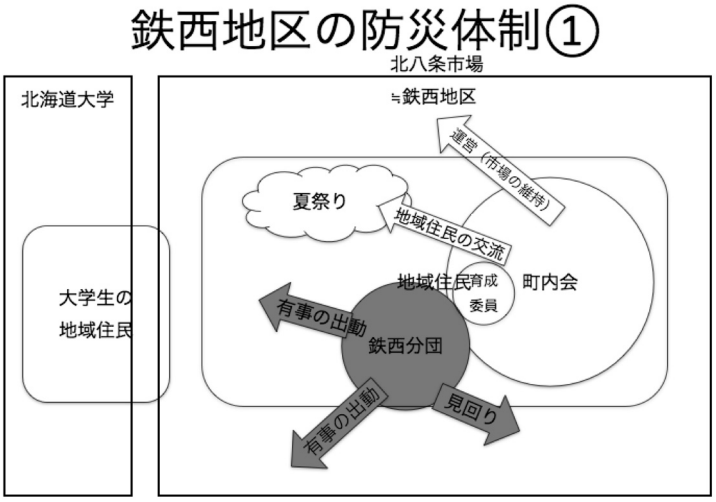
また、連合町内会によって子ども会が組織されており、キャンプや、近郊の海への引率、子どもみこしなど、地域の子供の健全な成長を目的とした行事の運営を子ども会担当の住民が行っていた。この会員は後に札幌市青少年育成委員会[6]の育成委員として位置付けられた。

・当時の地区内の行事の運営状況

このような鉄西地区運営において、地区内の最大のイベントとして毎年鉄西夏祭りは開催されてきていた。鉄西地区内に唯当時の夏祭りは連合町内会の主催のもと、商店街の店主たちによって企画、会場の設営などを行い、夏祭り当日は商店街の住人が参加し、飲食をしながら団欒するというようなものであった。

・再開発以前の鉄西地区におけるまちづくりの目的意識

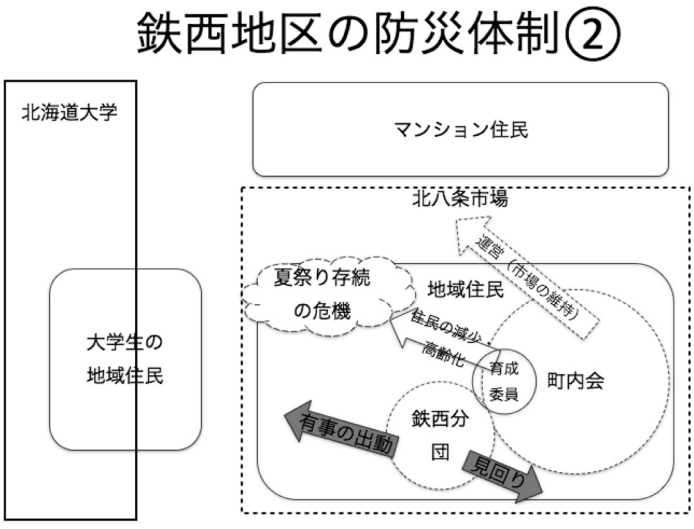
当時の鉄西地区の町内会運営において、主眼に置かれてきたのは、町内会の店主たち自身による、市場の維持であった。鉄西分団としても、上記のようなむら社会的要素の強かった鉄西地区内において、北八条市場の自営業者達が「自分たちの街は自分たちで守る」という義勇的な意識を第一義的な参画理由に掲げ、これをもって消防団に参画していた。そこへは大学生など数年後には転出してしまう住人に対する意識には希薄であったため、北海道大学の敷地に対する鉄西地区としての運営意識や防災意識は持つことが無かった。こういった意識のもとにおける当時の鉄西地区の運営はむら社会のそれにも類似していると言えよう。



②再開発開始による鉄西地区と鉄西分団の危機

・鉄西地区の住民の構成の変化

鉄道高架化を経て、商店群や家屋の立ち退きが相次ぎ、鉄西地区の町内会活動や消防団活動では、住民の勢力が弱まっていった。1994年頃までには札幌駅北口周辺には多くのビル施設やマンション・アパートが立ち並び、今までの街並みが大きく変化していき、その後1998年ごろを境に急速に鉄西地区の人口は回復、転じて増加してい



った[7]が、その殆どを新たにマンション・アパートなどに居住し始めた住民（以下、マンション住民）が占めていた[8]。彼らと以前より居住していた住民との間での交流は乏しく、地域課題などの共有をすることが少なかったことから、マンション・アパート住民の不参加などにより参加人数を徐々に減らし町内会や消防団の活動は大きく停滞していくことになった。

・地域行事存続の危機

鉄西地区の住民の構成の変化に因る町内会や消防団への不参加の状況は2003年頃まで続くことになり、このような困難な状況の続く中で、ついに鉄西夏祭りなどの開催中止を巡る話も地区内でされるようになっていった。

しかし一方で、リトルキャンプは存続し続けた。リトルキャンプは以前から居住する地域住民である育成委員だけでなく、学校の教員、そしてマンション住民が児童の保護者の多くを占めるPTAによって運営されており、リトルキャンプにおいては、育成委員とマンション住民との間に「子供を育てる」という意識の共有がなされており、このことが多様な住民の継続的な参加を可能なものとしていた。

・再開発による鉄西分団における問題

再開発により、鉄西地区の町内会や鉄西分団に在籍し、中心的な役割を果たしてきた北八条市場の商店街の自営業者の人々は、再開発の土地売買の影響を受け、徐々に鉄西地区を離れることとなっていったが、一方で新入団員はほとんど集まることはなかった。活動面においてもまた、団員の減少と高齢化の顕在化、木造家屋の減少と消防団が消火活動を行いづらい高層ビルの増加と公設消防の充実化によって公助として機能してきた消防団の活動も従前の状態では成り立たなくなっていくようになり、次第に、鉄西分団内での議論は分団の解散もしくは隣接する分団との統合を視野に入れた方針へ移行していく事となりこの状況は2003年頃まで続いたが、結果としては、札幌市北消防団本部から引き続き鉄西分団の活動の継続を依頼されることとなり、活動の停滞は続いていた。

(3) 大学生の鉄西地区への参加（Ⅱ期）

①大学生の鉄西地区への参加

鉄西夏祭りの存続の危機になどに挙げられる鉄西地区の運営の危機的な状況の打開策として、鉄西地区内において、新たな動きが生じた。それは、北海道大学の学生が組織するよさこいサークル２団体のAサークル、Bサークルの夏祭りなどといった行事への参加の開始である。

・夏祭りへのよさこいサークルの参加

夏祭りの存続が危ぶまれる中、育成委員が主催するリトルキャンプは継続し続けていた。この育成委員とよさこいサークルであるAサークルの大学生の出会いは、育成委員のCさんとDさんが新たな担い手を模索している中で生じた。Aサークルは、日本各地のお祭やイベントに積極的に参加し、楽しむということを主目的とした学生サークルであった。よって、鉄西地区から声がかかった際にもこれ

に応じ、リトルキャンプへの参加を試みた。最初の参加時にはPTAなど親世代の反発があったというが、育成委員のPTAへの説得及び学校への確認によって大学生は見学として参加することができた。Aサークルの学生のリトルキャンプへの見学としての参加を経て、2004年からはAサークルとして本格的に鉄西夏祭りへ参加することになった。

・夏祭りの変化

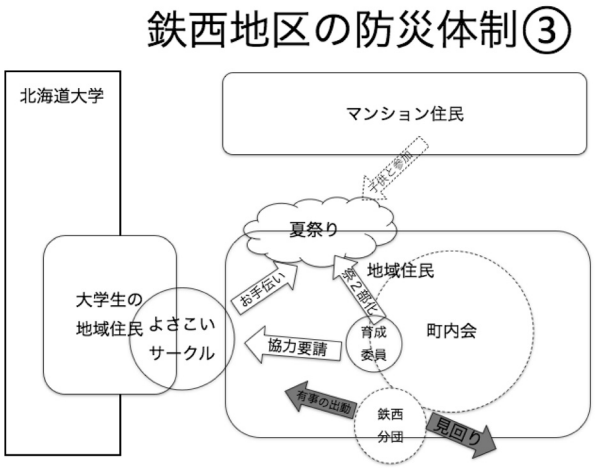
鉄西夏祭りは、中止も危ぶまれたが、育成委員が運営に参加することを提案し、一旦夏祭りの存続が決まった。地域住民の育成委員としての参加によって、鉄西夏祭りのプログラムにも変化が起きた。前半（午後二時頃）からは「子供大会」、夕方以降から「第二部」として児童向けの時間帯を設定した。これによって、親世代（＝マンション住民）も夏祭りへ顔を出すようになった。

・よさこいサークルの青年部への参加

以上のような内容の変化とほぼ同時に鉄西夏祭りへ参加したAサークル（のちBサークルが分化）がこの祭へ参加し、当初は祭の会場設営の手伝いを中心に行っていくようになり、徐々に鉄西地区内において大学生がまちづくりの主体の一員であるという意識が芽生えていったが、これと同時に、Aサークル内のメンバー数名もまた、地域住民の鉄西地区を盛り上げたいという強い意志に感化され、より鉄西地区に特化した地域活動を活動目的に掲げるメンバーが現れた。彼らを主体とし、2004年の12月にBサークルが新たに創設、更に、Bサークルが主体となり2008年4月には、よさこいサークルの大学生が鉄西地区の町内会の青年部として位置づけられることとなった[9]。こうして地域住民の信頼も得つつ、地域に密着した存在となっていった。

②鉄西分団への大学生の入団

鉄西地区へのよさこいサークルの参加が契機となり、鉄西分団にも大きな変化が生じることとなった。鉄西地区の町内会活動への大学生参加から程なくして、鉄西分団の元へ、AサークルBサークルから各１名ずつ大学生が入団することになった（2006年）。



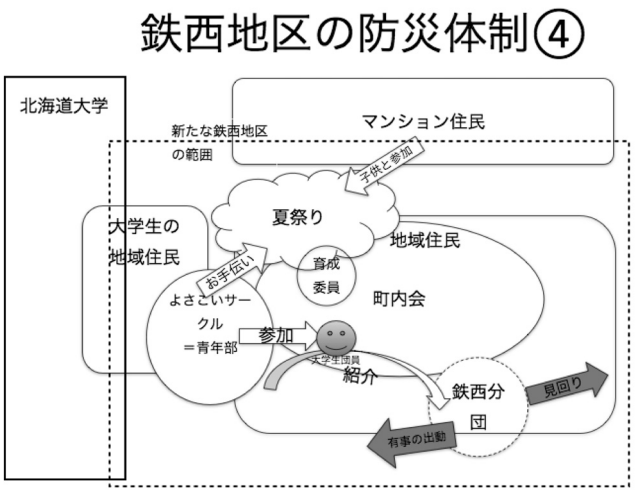
③鉄西地区へのよさこいサークル参加の意義

こうした大学生のサークルによる活動の特徴は、地域のまちづくりに興味がある学生が一時的に個人単位で集まった団体ではなく、地域住民とよさこいサークルとの関係であり、その団体の構成員である学生が卒業等で世代交代して

も、地域との関係に継続性があることである[10]。つまり、鉄西地区の住民は、大学生をすぐ居なくなる個人としてではなく、大学生のサークルという集団として捉えるようになったのである。そしてこれがきっかけとなり、鉄西地区の中に、マンション住民と「地域の子供を育てる」という意識を共有出来ていた育成委員を媒介として、徐々に「大学生のように、鉄西地区に長く住み続けることが難しい住民であっても自分たちの役割を担うことができる」という意識が新たに創られたのである。

④なぜ鉄西分団に大学生が参加できるようになったのか

同じ鉄西地区の住民ではあるが消防団員ではないEさんからの提案により大学生が入団することになったが、再開発以前からも居住していた大学生に対して、今まで鉄西分団が彼らを入団対象としてこなかったことには理由が2点あった。一点目は、前例がないということとであった。また、もう一点の理由は、鉄西分団のなかにそういう発想がなかったということだった。しかし、鉄西地区におけるよさこいサークルの夏祭りへの参加が、こうした地区の意識の変容をもたらし、それは、「自分たちの街は自分たちで守る」という意識の根強い消防団の在り方にも一石を投じた。大学生が入団する決め手は、鉄西分団のみの判断ではなく、鉄西地区の中に新たに出来つつあった風土、考え方に起因していた。そしてその意識は、団員ではないものの、鉄西地区の地域住民であり育成員であったEさんによって鉄西分団に大学生の入団の可能性を考えるきっかけを与えた。こうして鉄西分団は、よさこいサークルの参加した鉄西地区を媒介として、大学生団員を受け入れることとなった。



(4) 大学生消防団員の入団による鉄西地区の共助の再構築（Ⅲ期）

①大学生消防団員の入団

上述の通り、鉄西地区の町内会活動への大学生参加から程なくして、よさこいサークルのAサークル、Bサークルから各１名ずつ大学生の消防団員が鉄西分団へ入団することになった（2006年）。そして彼ら２名の入団以降、大学生団員は途切れること無く入退団が継続しており、2013年12月現在では11名の大学生団員が在籍している。

②考察

・都市化に伴う消防団の活動内容の変化

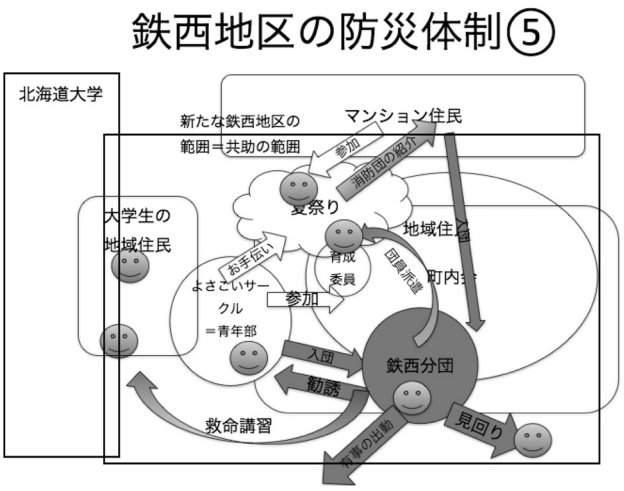
鉄西分団は数年しか居られない大学生団員を受け入れるという機会を得たことで、その活動意義についての問い直しが生じた。つまり消防団を、災害発生を未然に防ぐための予防、防火防災の啓発を行う組織として新たに捉えるようになっていったのである。つまり、地域防災における共助を促進させる組織として鉄西分団を位置付け直したとも言えよう。これにより、鉄西分団の新たな活動意義が創りだされることになった。

・消防団の担い手の変容

また他方で、大学生団員を受け入れることによる課題を乗り越えるために、鉄西分団の中で大きく意識が転換することとなった。

まず、鉄西分団の活動目標を「自分たちの街は自分たちで守る」、つまり分団自体が先頭に立った消火活動の徹底から、「大災害が起きた時に先頭を切って活動ができるような人を育てる」ことを目的にしたことである。そして大学生の団員への教育目標として「卒業しても災害が起きた時に行動できる人になってもらう」ことを掲げたことである。こうすることで、鉄西分団に短期間しか在籍できなくとも、今後の大学生団員自身にとって意義があるという意識を持ったことで、大学生団員の短期間での入退団の実情を乗り越えた。こうした従前の厳格な活動体制とは異なる意識付けを行うことで、今まで地域活動に参加することが学業を始めとした諸活動への参加で制限されざるを得なかった大学生の参加を可能にした。

大学生の団員を受け入れたことにより、今まで市場の住民の同士のやりとりの元で行われてきた団員間の関係性を育むコミュニケーションなどの方法にも変化が生じた。例えば、定例会では、分団の連絡事項とは関係ない何気ないやりとりを地域住民の団員と大学生との間で行うことで大学生が自分たちの居住する街のことを知るきっかけとなっており、また鉄西分団内の信頼関係を育む場所ともなっている。またこうした工夫は訓練活動にも現れている。また訓練活動以外でも、鉄西地区内のイベントなどへ大学生団員を動員し、防災啓発活動を実施することを心がけている。そういったイベントなどへの参加を通じて大学生団員が鉄西地区の雰囲気や、青年部などの活動の実態を知る場にもなっている。



・地域包括的な共助の再構築

大学生団員が入団したことで、鉄西分団の対象とする区域が従前の市場周辺

及び、市場の商店街の住民から拡充し大学生、マンション住民を含むようになったことで、共助の担い手として地域住民をより包括的に捉えるようになり、そうした幅広い層へ向けた防災啓発活動の展開につながっている。大学生の参加により鉄西分団の防災活動の対象者が拡充し、それが結果的に今まで視野に入ってこなかった北海道大学の学生、交流の機械の乏しかったマンション住民とのやりとりの機会の増加を呼び、より全体的に共助を育む媒介として機能するようになったのである。また、鉄西地区については大学生団員である特性を主に分団長の提案等によって夏祭り時の子供、親とのやりとりや、大学内での活動を実施し、昔から在住する住民だけでなく、アパート・マンション住民や、大学生へ防災意識を啓発する場を作ることができている。つまり大学生の参加した消防団を媒介として、今までの北八条市場の範囲にとどまらず、マンション、北海道大学を含んだより広範な鉄西地区における共助を育むことを可能なものにしているといえよう。

３．おわりに

(1) 結論

①都市化に伴う住民のまちづくりの認識変容の条件

・地域課題の共有

自らの組織の限界を認めて従来の組織の活動のあり方を変えていくということは簡単なことではない。しかし、これを乗り越え、更には大学生などの新たな参加を可能にしてきた町内会には、危機的状況の打開のポイントがあった。それは、以前からの地域住民と新たに居住し始めた地域住民間で共通する課題が共有できていることであった。つまり、地域の子育ての問題という課題がマンション住民と育成委員に任命されていた数名の地域住民との間で共有できていたことである。これを機に子育てを念頭に入れた夏祭りのプログラムが新たに展開されていくようになっていった。つまり、町内会の方が、新しい地域課題としての子育ての課題を意識し始め、それに対応して、町内会の在り方を拓くことを可能にしたのである。

・摩擦の乗り越え

しかし、大学生の参加は、当初は町内会やPTAの中にも反発があり、スムーズに展開していったわけではなかった。普段関わりの薄い大学生の参加を親世代では安全面で不安視する意見がこの当時は強かったのだろう。この時、育成委員は、PTAに説得し、学校にも了承を取ることで大学生の参加を一旦実現させた。リトルキャンプや夏祭りで実際に大学生が活動していく中で、祭を盛り上げようとする大学生の姿を実際に観ることで、鉄西地区の住民も「一年二年経つうちに学生なしじゃ出来ないというふうに納得して」いったのだ。

地域に新たな要素として外部の者、今回の事例では大学生などが加わっていく時に重要なのは、元居る地域住民がある程度納得する形で大学生などを理解した上で、大学生が参加した実際の活動を経

て、住民が期待していた効果以外にも外部だった者の参加には意味があるということを認識して初めて新たな要素が地域には組み込まれていくのである。

・組織のあり方そのものを見直し、作り変える

大学生が参加したことにより新しい活動が展開されることで鉄西地区では「大学生もまちづくりの担い手である」という新しい文脈が徐々に形成され、大学生が更に鉄西地区のまちづくりに意味ある存在として位置づいていくことになった。

そうすることで、町内会活動のあり方にも変化が生じた。町内会活動の意識の変化は、偶然的なように見えるが実は、大学生が入ってくることによって、町内会側は反省的に自分たちの組織のあり方を振り返ることにつながった。

つまり、大学生という異質な他者が視野に入ってくることで、町内会の在り方そのものを見直すようになっていったのであり、そこには大学生という異質な他者を受け入れていくための町内会のあり方を探る学びの過程があったと言えよう。言い換えれば、地域の側が外部のリソース、アクターとつながりながら、自分たちの地域課題を見直していく新しい方法を地域自体が学んでいった組織のあり方そのものを見直し、作り変えていく過程であったのである。

②消防団への大学生参加の意義

次に、都市部消防団への大学生参加の意義について述べていこう。１点目には、大学生が関わることによって鉄西分団は、自分たちの地域活動の意味を大学生の視点から考える機会を持つことができるという点である。大学生消防団員は、短期間で入退団が行われ、団員の入れ替わりが激しいが、その中で鉄西分団は大学生が地域に関わっていくことの意味付けを整理していく必要があった。それは地域の活動自体は従来、地域の必要との関係のみによって意味づけてきた消防団を、自分たちのコミュニティの外に位置づけされてきた、組織の外部にいる住民というアクターが持つ客観的な意味をもう一度地域の人達が意識化していくプロセスとも言えよう。このプロセスを経て、「大学生が学んでくれたらいい」という消防団の、消防団員に対する従来の意味付けとは異なる意識を新たに獲得することとなった。言い換えれば、消防団というコミュニティ自体が広まったと言えよう。従来のようにその地域に残り、活動することの出来ない人達であっても地域やコミュニティを変えていく重要な役割を担えるのだという意識へ変容したのである。

２点目としては、大学生自身にとっての消防団という組織の捉え方の変容についてである。G分団長が「教育の場になればいい」と言うように、 消防団の教育的な機能に分団自身が注目することは、今後の消防団の可能性自体が広まっていく契機となろう。現代社会で消防団のもつ意味、消防団活動を通じたより具体的な防災教育実践を行うがゆえに発揮できる消防団の教育的な機能と社会的な役割を提示していると言えよう。

３点目として、消防団が防災教育の場となる可能性について述べておきたい。今回の事例は、確かに活動地域は鉄西に限定されてはいるが、大学生の今後の地域活動への参加の促進を見据えた社会的な貢献活動、社会に関わるということを支援する窓口の機能を持っているのではなかろうか。このような新しい消防団のスタイルをこの事例は提起していると言えよう。そして従来の「火消し」という意味合いを超えた新たな機能として、大学生が実際に参加する中で消防団のミッションに新たな変化が生まれた今回の事例は、消防団が広い意味での防災教育を実践する場として変容したということであり、今後、マンション住民も含めた地域課題としての防災教育を打ち出していく可能性があるとも言えよう。

③都市化地域における共助の再構築の論理

上述してきたような地域の消防団の変容が、地域の人達にとって、どのような意味を持っているのだろうか。従来硬直的、閉鎖的な組織だった消防団が、他者の視点から、自分たちの活動を見て、新しい活動スタイル柔軟に作り替えていったこの経験を経ることによって大学生以外の住民達との関わり方も広がっていくのである。鉄西分団の活動展開は、自分たちの組織活動の在り方を見なおして作り変えることによって突破した事例として位置付けられよう。

また、今回の事例は、地域組織の学びのプロセスや自分たちの限界を客観的に認識しながら、地域住民自身も変わることによって、新しいリソースを引き込むという過程を経ている。大学生の行う地域活動は、大学生の側が地域社会の方に移行し、新しいコミュニティの側へ行き、学んでくる、などいったような図式で考えがちであるが、今回の事例においては、大学生が地域のコミュニティに関わることで、このコミュニティ自体も動き出して変容していくという過程を観ることが出来た。そのコミュニティの変化を通して大学生は変容し、地域の人々もまたその変化を通して新しい価値観や活動を作っていきながら、新たに学んでいくのである。

消防団の今後の新たな役割を示唆するような多様な可能性を実際に鉄西分団は切り開いてきたと言えよう。そういう可能性が開けてきたからこそ、上述したような今までの地域が意識してきた共助の枠を拡充し、ありとあらゆる人々への関係性を創りだしていけるような消防団の活動の展開に繋がっていく事ができるだろう。

④まとめにかえて

今回の事例は、大学生の参加が元となり、消防団の構造の論理自体を作り替え、より開かれた地域ベースの新しい消防団像を創りだしてきた。また、消防団と町内会はそれぞれ別の組織であるが、消防団の土台は地域社会であり、消防団単体を見直すのではなく、地域社会そのものに目を向けないといけない。つまり、地域社会そのものの現代的な発展を視野に入れ、共にオープンな組織になっていく見通しをつけるべきなのではないだろうか。

消防団の位置している地域社会に目を向け、地域社会そのものが開かれ、地域の課題を発見し、地域と消防団とが真に協力しあって多様なアクターと関係を育んでいくような地域コミュニティになっていった時に、初めて消防団にも然るべき変化が訪れるかもしれない。それは一見他力本願のようにも見えるが、そのプロセスは同時進行であり、地域と消防団の変化には同じ流れをくむ必要があるのである。消防団のこれからを考える時には、消防団は、基盤にしている地域社会そのものの現代的な発展、それを視野に入れる必要があるだろう。

(2) 課題

以上、都市化の進む地域における大学生の消防団への参加の意義を検討してきた。しかし、住民の大学生参加が開始された時期の学習の内実や、大学生の参加した消防団の活動の新たな展開による地域の防災力に対する実証的な効果を詳細に分析することは出来なかった。また、他の地域における消防団活動の実態との比較検討を行うことが出来なかった。以上を明らかにしていくことを今後の課題としたい。

---

1 以下、本論では「共助」を使用した際、この意味を指すこととする。
2 山崎丈夫 1999 『地縁組織論 地域の時代の町内会・自治会コミュニティ』 自治体研究社
3 財団法人日本消防協会 編 2013『消防団百二十年史』近代消防社
4 公共財の私的供給システムとしての消防団の研究 産研論集（関西学院大学）小西砂千夫 25号 1998
5 札幌駅周辺地区整備構想 駅周辺の現況について 札幌市 1979,3
6 札幌市青少年育成委員会とは、地域において青少年の健全育成に関する実践活動を推進するため、地域住民などの方々で構成されている組織である。札幌市の各連合町内会単位(市内90地区)に設置されており、鉄西地区青少年育成委員会はその一つである。この構成員である育成委員は、青少年の健全育成の実践活動の推進に適任と思われる方を候補者として推薦し、それを受けて市長が選任する形式をとっているが、各連合町内会に居住する地域住民がその地区の委員を務める場合が多い。
7 てっせいまちづくりセンターだより第１号 2004,12
8 2006年の時点で、鉄西地区住民に占めるマンション居住者の割合は93%となっている。（てっせいまちづくりセンターだより 第11号 2006,8より。）
9 てっせい まちづくりセンターだより第２２号 2008,6
10 鉄西まちづくり学生推進委員会の活動 札幌市北区鉄西まちづくりセンター長 米澤 浩昭 名寄市立大学 道北地域研究所「地域と住民」第 29 号 2011,3

＜参考文献＞

赤尾勝己 『学びのデザイン：生涯学習方法論』玉川大学出版、1998
後藤一蔵『消防団の源流をたどる ―二一世紀の消防団の在り方―』 近代消防社、2001
後藤一蔵『国民の財産！消防団～世界に類を観ない地域防災組織～』近代消防社、2006
佐々木正道編著『大学生とボランティアに関する実証的研究』ミネルヴァ書房、2003
杉万俊夫編著『コミュニティのグループ・ダイナミックス』京都大学学術出版会、2006
財団法人日本消防協会編『消防団１２０年史−日本消防の今日を築き明日を拓くその歩み−』近代消防社、2013
橋立多美 『ルポ消防団』那珂書房、2009
山崎丈夫 『地域自治の住民組織論 第2版』自治体研究社、1998
山崎丈夫『地縁組織論 地域の時代の町内会・自治会コミュニティ』自治体研究社、1999